

保育ソーシャルワークの可能性と保育者との協働

富士市立こども療育センター 小黒和枝

要旨

現代の保育施設において、子どもと保護者の幸福のトータルな保障に向け、保育者と多職種との協働による、保育の原理や固有性に合わせた保育ソーシャルワークの機能が必要である。

1. 目的

現代における、保育施設でのソーシャルワークについての問題を取り上げ、その実態を明らかにし、保育ソーシャルワークのあり方を検討する。

2. 方法

A 市に勤務する保育者 12 名に無記名での質問紙調査を実施。調査時期は 2020 年 9 月～11 月。倫理的配慮：依頼文にて説明し回答をもって同意を得た。個人が特定されないよう配慮している。

3. 結果

(1) 保育者が大切とする保育観の実態や課題

保育者は、集団保育での言葉を通じた関わりの中で、子どもの「協同性」「道徳性」を育てることが最も大切と捉えていた。保育施設の重要な役割として①「1 人 1 人のこどもの成長を育む」②「こども集団の中で社会性を育む」③「保育に欠けるこどもと家族の生活を支える」④「保護者への子育て支援」⑤「地域社会とのつながりを担う」が挙げられた。個別支援に関わっているとクラス運営が難しいと感じる時がある保育者も多くおり、両立させたいが難しいと感じていた。

(2) こどもの発達支援と家族支援等のソーシャルワークについて保育者が感じる課題

回答した全ての保育者が、個別支援や配慮が必要な子どもの対応に困った経験を持っていた。子どもの様子は「注意が続かない」「指示に応じられない」「子ども同士のトラブル」であった。また、配慮が必要な子どもの保護者へ支援を行い、その内容は①「子どもの支援を具体的に伝達」②「園と家庭で子どもの支援を統一」③「保護者の心情を聞き子育ての相談に乗る」であった。保育者が保護者支援に悩んだ時の解決方法として「保護者と信頼関係を作る」「園長や職員に相談・連携」が挙げられた。

回答した全ての保育者が保育者以外の職種と連携する必要があると感じていた。ソーシャルワークのイメージの持ち難い人は 3 割ほどであった。

4. 考察

(1) 保育固有の課題と保育ソーシャルワーク

個別支援とクラス運営の両立という保育固有の課題に対し、生態学的視座による保育実践の 4 つの成立要件により保育ソーシャルワーク実践は可能なのではないかと。要件は、①「実践の基盤となる価値観の共有」②「情報の共有」③「個ではなく連携によって課題に取り組む姿勢」④「適切なリーダーシップとリカレント教育」である。

(2) すべての子どもの発達を真に保障する保育

保育者が子どもを常に「意味を作る」存在として捉え、フレイレの「対話的關係成立の条件」による①「人間に対する信頼」→②「信用」の形成→③「希望」を持った子どもと大人が探究→④批判的思考を含み変革するという、4 つの段階を持つことにより、すべての子どもの発達を真に保障する保育や個別支援が成り立つのではないかと。

5. まとめ

現代の保育施設において、保育の原理や固有性に合わせた、保育ソーシャルワークの機能がより必要である。保育者と社会福祉援助職の協働を通じて専門性の相互理解と生態学的視座を共有することにより、保育者の保育ソーシャルワーク技術の習得や実践も望まれる。

具体的には、包括的・総合的理解とともに①アセスメント機能②支援機能の 2 つを確立していくことが求められる。保育領域で活用するために保育者も理解可能であり、日常の保育業務の中でモニタリングできるものでなければならないが、保育活動と混然一体化してしまう可能性がある。

また社会構造から、インクルージョンの点でも保育施設で専門的支援を提供することが今後ますます必要となる。地域での保育ソーシャルワークの構築に向け、新たな取組みが求められている。

参考文献

土田美世子「保育ソーシャルワーク支援論」明石書房（2012）